

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

財団法人かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2009年11月 No.2

今号の内容

- ◇【長期】高校生交換留学プログラム
出発と来日
- ◇【短期】高校生交換留学プログラム
中国・韓国での体験
- ◇大学生招へいプログラム
夏の研修会と新奨学生来日
- ◇青少年交流事業
中学生交流プログラムスタート
助成事業報告
- ◇講演会
近畿大学附属新宮高等学校で開催

日中青年会議 成功裏に終了



【長期】高校生交換留学プログラム

出発と来日

8月にインドネシアと中国への派遣生2名が出発し、これで第3期生、13名の派遣生全員を送り出しました。

インドネシア、中国への出発を1ヶ月後に控えた7月に、懇談会を行いました。周囲の友だちは、英語圏ではない国へ留学することに驚いていたようですが、本人たちは英語圏ではない国で、日本と同じアジアでの異文化体験をととても楽しみにしているとのこと。留学先では、民族楽器に挑戦したり、スポーツなどを通じてたくさんの友だちを作り交流を深めたいと話していました。

また、8月下旬にはインドから2名の受入生が来日。来年1月までの約半年の日本滞在となりますが、到着後の懇談会では、「インドと日本は古いものと新しいものが共存していて似ている部分があると思うが、異文化の中で様々なことを見て感じて、体験したい。」「スポーツが好きなので体育系の部活動に参加したい。」とこれから始まる日本での生活を楽しみにしていました。

毎日の日本語学習や授業のほかに、秋は文化祭や体育祭など多くの行事があり、早速たくさんのごことを経験しています。



上：インドネシア・中国への派遣生
下：インドからの受入生

かめのりコミュニティ

【短期】 高校生交換留学プログラム

中国・韓国での体験

7月から8月にかけて、中国と韓国でそれぞれ5名の高校生が約1ヶ月の異文化体験をしてきました。

「報道でしか知らない中国を実際自分の眼で見て、もっと知りたい。」「建築の楽園と言われる中国で古い建物から新しいものをたくさん見てきたい。」「韓国と日本の歴史を勉強し、これからの日韓交流の良い架け橋になりたい。」「何事も知りたい、学びたい、という気持ちを大事にしたい。」などそれぞれの思いを胸に異文化の世界へ旅立った高校生たち。

帰国後、寄せられた体験レポートには、「中国滞在中目にしたもののほとんどが、どこか日本に似ているようで全く異なるもので、本当に様々な経験をした。」「この留学がなければ気づかなかったことが数え切れないほどある。」「韓国滞在中、より積極的に物事に取り組むことができ、たくさんの人との素敵な出会いがあった。この出会いを大切に、この経験

を活かしていきたい。」など1ヶ月で得たことは計り知れません。もちろん楽しいことばかりではなく不安や辛いこともありました。それらを含め体験として高校生の心にしっかりと刻まれました。



上：韓国出発前の懇談会 下：中国への派遣生

大学生招へいプログラム

夏の研修会と新奨学生来日

8月下旬、山梨県河口湖で研究テーマ発表、意見交換や奨学生同士の交流を目的に研修会を行いました。

研究テーマ発表では、政治、福祉、獣医学とそれぞれの研究の分野が全く異なり、非常に興味深く聞くことができました。研究の動機やテーマに対する思いも知ることができ、教員と話し合いながらテーマを絞り込み、論文を徐々に形にしていっています。

この他、韓国で習った日本語が実際に使われていない、習慣の違いが誤解を生んだという異文化での経験談や奨学金制度についての意見交換を行いました。

河口湖や富士山の美しい景色に迎えられ、少人数ならではの、より踏み込んだ意見交換や交流となりました。

また、10月には、カンボジアから新たに奨学生、Nuth Sotheavy (ヌット ソテアヴィ) さんを迎えました。Nuth さんはカンボジア

上：カンボジアからの奨学生を迎えて
下：大学院奨学生 河口湖を背景に



王立法経大学で法律を学び、名古屋大学大学院法学研究科の修士課程に進みました。特に人権についての研究に興味があり、日本語習得にも力を入れながら、知識をより深めたいと意気込んでいます。

青少年交流事業

中学生交流プログラムスタート

2009年度から日本の中学生をアジア各国に派遣する中学生交流プログラムを実施します。現地の同世代の生徒との交流や伝統文化の見学などさまざまな体験を通じて、相互理解を促進し交流することを目的としています。

本年度は、2007年度から助成している(財)国際文化フォーラムの事業、中国の中学校向け第二外国語教育用日本語教科書『好朋友—ともだち』全5冊の完成を記念して、「好朋友特使」として大連に派遣します。

教科書『好朋友』が、漫画の物語を主軸に展開し、主人公が父親の転勤に伴い大連に住むことになった横浜の中学生であること、大連のある遼寧省が神奈川県と友好提携関係にあることから、神奈川県内の中学生を対象に、7名の中学生が特使として選ばれました。

出発に向けこれまで2回のオリエンテーションが行われました。オリエンテーションでは、特使同士の交流を深め、大連についてや中国語の学習のほか、横浜を紹介するために手作りの地図を作りました。地図は自分たちが撮影した写真を貼付するなど特使全員がアイデアを出しながらオリジナルの地図ができました。

当初10月に派遣予定でしたが、新型インフルエンザの影響により延期となりました。

特使は大連の中学生とコンピューターを利用した交流を深めながら会える日を心待ちにしています。



上：横浜の地図を作成中 下：製作中の地図を手に

助成事業報告

当財団では国際相互理解推進に寄与するさまざまな活動を支援します。
これまで支援した助成事業の報告を各団体からいただきました。

黒板プロジェクト

モンゴルの小中学校に黒板を贈る「黒板プロジェクト」は、2009年度8年目を迎えました。今までに配った黒板はモンゴルの21県の604校、1312枚になります。今年は134枚をボルガン県、フブスグル県、オルホン県のすべての学校、セレンゲ県ズンブレン・ソム、ウランバートル市郊外の一部の学校へ届けられました。

今年、かめり財団の黒板10枚はオルホン県にある5つの学校に届けました。オルホン県はエルデネト市というモンゴル第3の町が県都になっており、遠隔地から移住してくる人々も多く、学校では生徒数がとても増加している場所です。生徒数の増加は教室や設備の不足につながっており、持って行った黒板は非常に喜ばれました。どの学校の先生方からも、ご寄付いただいたかめり財団への感謝の気持ちを伝えてほしいと頼まれました。

過疎化する地方と人口が集中する都会周辺と、二つの世界が今モンゴルにあります。私たちは来年度、この過疎化している地域と人口が流入してきている中央部に約200枚の黒板の配布を計画しています。配布10年目には全国すべての学校に4枚ずつとなる400枚を配布したいと思っています。ぜひ、またご協力をお願いいたします。

私たちは、モンゴル子どもたちがよりよい環境で学ぶことができるよう支援して下さった皆さまの気持ちを伝えるために、これからもお手伝いしていきたいと思っています。

NPO 法人モンゴルパートナーシップ研究所 (MoPI)
斎藤美代子



上：学校へ黒板を運びます
下：かめり財団の贈った黒板

日中青年会議

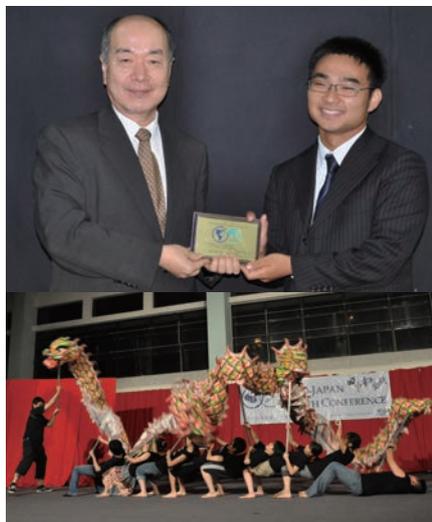
8月11日から19日まで、ユナイテッド・ワールド・カレッジ (UWC) 香港校で日中相互理解の推進を目的に日中青年会議 (Sino-Japan Youth Conference) を開催しました。両国から中学・高校生各24名と実行委員などを含め約80名が集まり、多くの方々のご支援のもと行われました。

UWCは80カ国以上からの高校生が生活を共にし、文化や考え方の違いを越えて友情を育み、平和と持続可能な未来を目指した教育の場です。この会議は香港と日本人のUWCの仲間が、日中間の無理解という問題意識の共有から生まれました。会議では、初めにゲームや自己紹介でお互いを知り、信頼関係を築き、経済、環境、歴史などの議論や発表、最終日には踊りや歌などを披露しました。終戦記念日には「平和祈念の対話」として、静けさと蠟燭の光の厳粛な雰囲気の下、親戚から聞いた日中両国の戦争経験を共有しました。「異文化交流の大切さ。実際に喋って仲良くなって、自分の言いたいことを言い合うことができ、初めて、お互いを知ることができるんだと思う。」と日本人参加者。実行委員は「一日一日、参加者が成長していく姿は、自らの文化の殻を飛び出す大切さを教えてくれた。」と充実感でいっぱいとなりました。

来賓として、かめり財団創設者康本健守理事からのご挨拶や香港日本国総領事館の佐藤重和大使や香港中文大学劉遵義学長をはじめとする方々からお話をいただきました。

この成果を活かし、来年度も会議を継続し、一人でも多くの中高校生が異文化とのふれ合いを通じて羽ばたいてほしいと心から願っています。

日中青年会議委員会
チーフ・オーガナイザー 古川知志雄



上：康本理事と古川さん
下：文化パフォーマンスで龍舞を披露

GMUN 日本代表派遣プログラム

GMUN (Global Model United Nations) とは、初めて国連が主催する模擬国連の世界大会です。開催地がスイス・ジュネーブだったことから、アジア出身者の参加が危ぶまれましたが、世界56カ国800人の参加者の中で、アジアは日本からの5名を含む12カ国104人が参加しました。

本年8月約1週間に亘るGMUNは日本の模擬国連では経験することの無い難しさと楽しさがありました。様々な背景を持つ人がいる会議では、自分の「いつものやり方」が通用しないということです。例えば、アメリカの参加者と議論する時は結論から主張を端的に繰り返し述べるのですが、ウズベキスタン、中国からの参加者と議論する時にはそのやり方では相手に不快感を与えてしまうことが、初めてわかったのです。

また、他国からの参加者とは会議以外でも話す機会があり、大会の議題について直接当事者から意見を聞くことができました。開発途上国の友達を目の前にして「貧困と紛争について」を議論するのは非常に辛いことでした。

最後に、GMUNが終わった後に何をするかですが、大会中に大阪清隆国連広報担当事務次長を始めとする多くの方々から、「自分の国のコミュニティの中でリーダーシップをとり、世界の貧困の事実を広める役割を担って欲しい」と繰り返し仰っていました。次回のGMUNはマレーシアで開催されますが、大阪事務次長らのお言葉を胸にとめて努力したいと思えます。

GMUN 日本代表派遣プログラム
渉外担当 小森谷祐司



上：赤阪氏と日本代表団
下：模擬国連会議中の風景

講演会

近畿大学附属新宮高等学校で開催

本財団理事・王敏氏（法政大学教授）の講演会が7月に和歌山県新宮市にある近畿大学附属新宮高等学校・中学校で行われました。80名ほどの高校2年生と教職員の方を対象に、「なぜ異文化理解は必要かー若者の日中ー」と題し、色々な国の人々、物事から刺激を受け、自分の考えを活性化させ考え方を広げていくことが異文化理解であるというメッセージが伝えられました。

遣隋使、遣唐使をはじめとする古代の交流や「七夕」「月見」など多くの日本の習慣が中国の古典にも見られること、日本と中国の異なる点などを例に挙げ、プロジェクターで多くの画像を用いながら両国の関係の深さを説明。特に生徒が興味を持った餃子の由来の話では、「日本と中国で餃子の歴史、食べ方、思いが異なり、2つの国は違う感覚で、その由来を考えず『当たり前』のように食べている。しかし『当たり前』であることを改めて考える

ことで異文化への理解が深まる。」と身近なものに目を向けることも重要だと述べ、生徒たちは熱心に耳を傾けていました。生徒からは、「日中の歴史的な良い関係を知ることができた。」「自分の今、身近にある事や物が歴史をたどると様々なエピソードがあることがわかった。」「日本と中国の歴史について理解が深まった。」という感想が寄せられました。

新宮市は、秦の始皇帝の時代、不老不死の薬を求め徐福という人物がやって来た地域とされ、中国との関わりが深いところです。市内には徐福に関する名所がありますが、この講演がきっかけとなり、自分の住む街にある中国との関係を調べることで、異文化理解へつながっていくことを願っています。

左：講演会の様子
右：徐福公園内の徐福像と一緒に（王敏氏）



奨学生のこぼ

体験レポートの中から、印象に残る文を紹介します。

この留学で学んだことは本当にたくさんあります。言葉が通じない国で、笑顔と優しさにふれ、小さな事でも感謝することを忘れないということ学びました。

1ヶ月間、毎日が楽しいという訳ではありません。でも、それは当たり前ことで、めげずに笑顔でいれば大概上手くいきます。この留学での思い出は私にとって宝物です!! 参加出来て良かったと心から思います。

(2009年8月 韓国(短期)へ留学 澤井未織さん)

日本の高校生たちはたくさんの時間を使って自分の好きな事に才能や技術をつけるために頑張っている。文化祭や体育祭の時はクラス全員が自分の力を使い一つの事に協力しています。中国の高校生は友達同士での協力や大勢で協力することは少ないです。大勢の人が協力するという事は素晴らしいことだと思うし、見習うべきだと思う。もう一つ中国人として見習うといいと思うのは日本人のように知らない人でも笑顔であいさつをするということです。

(2008年中国から留学 Chen Danさん)

今後の予定

11月 理事・王敏 講演会開催 釧路北陽高等学校・松江市立女子高等学校

12月 第3回かめのり賞選考結果発表

2010年

1月 かめのりフォーラム2010(第3回かめのり賞表彰式)開催

【長期】第3期生受入生帰国

【短期】第2期生中国・韓国から来日

<< 編集後記 >>

アジアからの留学生のレポートから、当然のように思っていたことが実は日本独特のものなのかもしれないと改めて考えることがあります。例えば文化祭や体育祭。みんなでひとつのものを作り上げていく過程が留学生にとっては異文化体験。生徒自身で行う学校の清掃も特異な事のように。留学生の視線を通じて私自身も学んでいます。留学生に感謝。(菊地)

発行人 / 西田 浩子

編集 / 菊地 佐智子

デザイン/イワブチサトシ (BUTI design)



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します!

財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町 5-5 共立麹町ビル 103

TEL : 03-3234-1694

FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp

URL : http://www.kamenori.jp/